



正面から

裏庭から見た生家

信綱の父である佐々木弘綱は、全国に名高い歌人・国学者でした。在野において歌道を普及したいという強い思いから、石薬師に生涯を閉じる決意で明治元年（一八六八）に新居を構えました。

石薬師に生涯を閉じる決意で明治元年（一八六八）に新居を構えました。

和歌の世界に在野の人としてせめて私だけでも残つていなければ、誰が民衆の佳作を選び出し紹介できようぞ。

ところが、明治十年（一八七七）、松坂の門人たちより、衰えつつあつた^{*1}鈴屋教会の監督をして立て直して欲しいとの申し出がありました。使命を果たした石薬師へ帰つてくるつもりで、同年十二月、生家をそのまま遺して一家は松坂に居を移すこととなりました。

明治十五年（一八八二）、父・弘綱は、優れた学者や歌人に会うため、また花見も兼ねて、当時十一歳の信綱を連れて東

佐佐木信綱（一八七一～一九六三）は、歌人であり、万葉学者であり、国文学者であり、第一回文化勲章の受章者です。郷土が生んだ歌人の業績を顕彰するため、「佐佐木信綱生家」（以下「生家」）を利用して記念館が開館したのは、昭和四十五年（一九七〇）十二月のことでした。開館五十年を記念して、あらためて「生家」について触れようと思います。

佐佐木信綱記念館 開館五十年を記念して
記念館だより 第35号

佐佐木信綱記念館 開館五十年を記念して

過去特別展をふりかえって

寄贈品のご紹介

信綱一首

学芸員のきまぐれコラム

目次・佐佐木信綱記念館

開館五十年を記念して

海道を歩いて東京への旅に出ました。そ

こで、友人の小中村清矩・福羽美静より、

「この信綱さんの教育は、一体田舎でどうなさるおつもりか。」と上京を勧められました。信綱は、どの旅先でも大人に交

じつて歌会に参加していました。そ

んな姿を見てでしようか。父・弘綱は友

人の熱心な言葉に負け、信綱の英才教育

のため東京永住を決意し、神田小川町に

新居を構えました。

一方その頃、石薬師の門人らが旧居を

管理していましたが、かねてから弘綱を

知っていた和泉村の藤田権四郎は、村の

会合場として使えるしつかりとした広

さのある家が必要だつたため、空き家の

話を耳にして譲り受けの申入れをして

いました。その後、明治十九年（一八八

六）、^{*2}木造中一階建て六〇坪の住居と

六）、^{*2}木造中一階建て六〇坪の住居と

土蔵一棟をそのまま和泉村に移築し、住

まいとしました。藁屋根がほとんどの当

時の農村で、佐々木家の家紋入りの瓦屋

根中二階造りは際立つていてことでし

ょう。「高名な学者の生んだ家ゆえ大切

に住もう」と心を配られた藤田家のおか

げでほぼ原型のまま保存され、昭和四十

五年（一九七〇）十二月、鈴鹿市は文化

事業の一つとして、藤田家より「生家」

を市費と寄付金により譲り受けて旧位

置に再移築し、「佐佐木信綱記念館」とし

て公開しました。

その後、平成二十年に補強工事を行い、

平成二十三年に登録有形文化財（建造物）

に登録されました。昭和六十一年には資

料館を併設し、今年度、五十年を迎えた。

近年、「建築百年」とよく言われますが、

「生家」は百五十二年を経過しており、

節目を優に超えていることになります。

切妻屋根の建物がつくる静穏な佇まい

が、記念館として今後更に継承されることになりました。

参考文献『石薬師のお師匠さま佐々木弘綱翁のおもかげ』、『おじいさんの明治維新―祖父藤田権四郎の生涯』（藤田豊著、平成十三年）

※1 本居宣長の歌学を継ぐ歌会
※2 移築される前の間取り図を見てみると、現在の「生家」では取り払われていますが、元は、玄関に入つて左側に炊事場があり、突きあたりには風呂場もありました。

お知らせ

■臨時常設展開催

令和元年九月五日から六日未明にかけての豪雨被害により、資料館展示室が使用できなくなりました。令和二年二月から資料室の修繕及び改修工事を実施し、現在は枯らし期間を取らせていただいております。その間、前号にも記載した通り、令和元年十一月一日から、「生家」主屋に臨時常設展を設置しております。

過去特別展をふりかえって

例年、特別展の報告を掲載しておりましたが、今年度は資料館の改修工事に続き、コロナ禍の影響もあり、特別展を開催することができませんでした。この号では、近年（平成二十一年度以降）の特別展を図録とともに振り返ります。

■信綱秘書 村田邦夫—師を敬慕し、“鈴鹿もうで”に捧げた半生—（平成二十一年度）

師・信綱の故郷に足しげく通われる村田先生のお姿を、人々はいつしか“鈴鹿もうで”と呼び、慕うようになります。信綱晩年期の秘書で、記念館の企画・運営にはじまり信綱顕彰に半生を捧げられた足跡に焦点をあて、直筆書簡を通して紹介しました。



■芸術院会員の歌人たち—佐佐木信綱から幸綱まで—（平成二十一年度）

昭和十二年、文芸（詩歌）部門創設「初」の芸術院会員として、斎藤茂吉らと選出されました。その後七十年余りを経て、令孫にあたる幸綱氏が同部門で芸術院会員に選ばれました。芸術院会員に名を連ねた歌人たちを取り上げ、歌集・自筆資料より、信綱や幸綱氏との交流の一端について紹介しました。



■信綱と坂田富美—温情のもとに秘書・門人として—（平成二十一年度）

大正十三年、信綱が西片町（現文京区）に住んでいた頃の秘書の一人でもあり門人でもあった、坂田富美を取り上げ、信綱と富美的交流や交流からうかがえる信綱の人となりや素顔を、写真やエピソードなどで紹介。新たな信綱像を掘り起しました。



■信綱と飯田恒治—『機関士の歌』誕生にみる師弟の絆—（平成二十四年度）

飯田恒治氏は国鉄に勤務するかたわら、昭和十九年から同協で竹柏会門人の椿一郎に歌を教わり、その縁で竹柏会に入会。晩年は信綱に直接師事しました。寄贈資料とともに、「機関士の歌」刊行における師弟の結びつき、家族同然の付き合いの中で深まつていった絆についても取り上げました。



■郷土に残る弘綱・信綱親子の資料—石薬師を中心として—（平成二十五年度）

信綱没後五十年目にあたり、郷土石薬師町の各家々に伝わり、大切に受け継がれてきた資料を一堂に展示しました。弘綱の亡き後も、信綱は「日本語いく千万の中にしてなつかしきかも『ふるさと』いふは」と歌に詠み、故郷を慕つて後年足を運んでいます。親子が郷土に残した足跡を新たに発見するとともに、郷土の人々との交流を紹介します。



■信綱の交遊録—『明治大正昭和の人々』を中心に—（平成二十六年度）

信綱の身近には常によき先達、よき友、よき後進が集

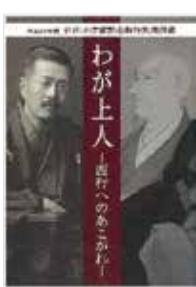
い、多くの人々との交流がみられました。信綱は自著『明治大正昭和の人々』で約二百五十名との交遊を記しており、学会・芸術界の人々との交遊の輪が幾重にも広がつていたことを、エピソードや大切に残されてきた書簡・関係資料を交えて紹介しました。

■信綱と雪子—二人三脚の文筆活動—（平成二十七年度）

長年にわたって信綱を支え続けた妻・雪子にスポットを当て、「一人がともにあつた約五十年間の軌跡を描き出しました。夫・信綱と共に書作を刊行するなど創作活動に意欲的な一面も持つ雪子との生活が、信綱の活動にどのように影響を与えたのか、その一端を明らかにしました。



■わが上人—西行へのあ「がれ」(平成二十八年度)



数え年五つの頃より英才教育をほどされ、古歌の暗誦を通して歌道に親しみ信綱。その出発点のひとつとなつたのが、中世の歌僧・西行の歌集「山家集」でした。遺された原稿や書籍などを中心に、信綱がいかに西行を愛したか、その思いに迫りました。

■佐佐木信綱とふるさと石薬師(平成二十九年度)



信綱が石薬師村に寄贈して文庫の一部や、故郷を詠んだ直筆の短冊、故郷訪問の写真など、約八十点の資料を展示しました。信綱がふるさとに抱き続けた想いを鮮に、あるいは懐かしく描きだすことで、新たな人物像に触れる機会としました。

■信綱と『心の花』の歌人たち(平成三十年度)



雑誌『心の花』は、佐佐木信綱が中心となつて明治三十一年に創刊されました(創刊当初は『いろの華』と表記)。創刊された直後の『心の花』、様々な派閥が寄稿する総合雑誌の役割を輩出し、やがて竹柏会の純然たる機関誌となつていきました。近代以降の短歌の歴史を概観しつつ、『心の花』から出た歌人たちを紹介しました。

■信綱と万葉集(令和元年度)



現存する日本最古の歌集である万葉集を出典とした「令和」時代の始まりの年として万葉集を取り上げます。万葉集の研究に生涯をかけた国文学者としての信綱をたどり、信綱が関わった万葉集研究の中から、『校本万葉集』の編纂、万葉集の外国語訳を中心紹介しました。

寄贈品のご紹介

今年度もご厚意によりご寄贈を賜りました。ご協力賜り、厚く御礼申し上げます。

■岡田家(石薬師) 資料/同家蔵 寄贈

父・弘綱と岡田時信・芳史兄弟は師弟関係にあり、その後信綱の代になつても親交が続いています。寄贈資料の中からM 15・9・29の弘綱の書簡をご紹介します。

封書の消印日付は、信綱一家が上京した年の明治十五年九月二十九日とあり、父・弘綱が岡田時信(平助)宛に送つたものであると思われます。

近況報告として「小子大学講師を拝命し、余り狭い家なので当月十六日、同じ番地へ宿替えした。」とある。これは小中村清矩の薦めにより、東京大學古典科、東京師範学校にて教鞭をとることになった事を伝えていると思われます。また故郷石薬師を想つて次の一首を詠んでいます。

すゝか山うき世へよそに へたてねど

月にてしのぶふる里の空
旧十五夜に、石薬師の空を
なつかしみ涙をこぼして。

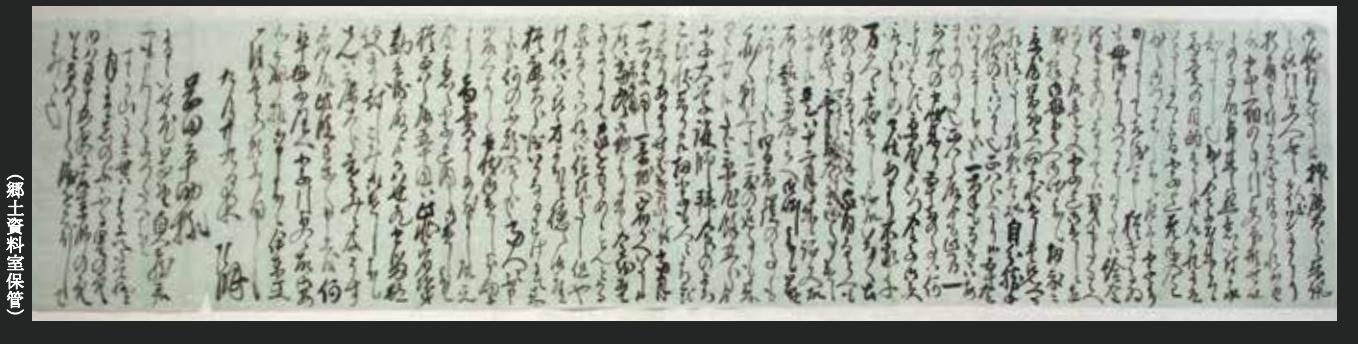


信綱一首・35

ふる雪の彌重け吉事ここにして
うたひあげけむことほぎの歌

昭和三十三年 信綱八十七歳

新年の初めにあたつて、降り続いている雪のようによいことがあります重なつてくれよと、
ここ因幡国序(島根県)で大伴家持が歌い上げたのであろう、年賀の歌を。(万葉集最後の歌は
大伴家持)《十二月》今年は大伴家持が因幡守に赴任して一千百年に当る。鳥取市では、国府の
跡、いま県立図書館のある地に歌碑を建てたいと、図書館長山本嘉将君のねもころな依嘱があ
つたので、「讚大伴宿禰家持歌」として、この作を書いておくつた。》大伴家持をたたえる歌碑
が鳥取県国府跡(鳥取市の因幡万葉歴史館)に建つ。《作家八十二年》より



学芸員のきまぐれコラム

新しい出会い

～Travel without moving～

文学を愛する者にとって、佐佐木信綱はあまりにも有名ですが、いままでは手放しで感心していただけでした。この度記念館の担当をさせていただくにあたり、初めて手に取ったものがあります。顕彰会で作成された『信綱かるた』でした。生涯一万余首を作歌された中で、信綱をよく知る方々が選ばれた五十首とは、また童心に返った気持ちで身近に感じたいという思いで読み始めました。その中から次の一首を引いてみようと思います。

白雲は空に浮かべり谷川の石みな石のおづからなる

白い雲はゆつたりと浮かんでいる。谷川にある、石、石、石。それぞれみなそれぞれの姿をしている。

何気なく捉えられるこの情景は、故郷に想いを馳せた心境だけではなく、今此居ることの幸せを噛みしめ、喜びを詠まれたように感じられます。石もひとつひとつ大きさや形が違うなあという部分は、信綱の標語である「ひろく、深く、おのがじしに」に通じていることが強く伝わります。生涯を通して、人を受け入れ、人との繋がりを大切にされていたこと、人と人との間に生まれる優しさや真心の温かさが伝わ

り、涙が誘われました。「短歌集・『鶯』」にあることを知り、故郷に戻ってきた自分を投影同一視し、心奪われる一首となりました。

信綱の短歌を身近な存在であるように感じられるのは、ユングの「無意識の定義」に通じるものがあるからではないかと考えます。これは無意識を〈個人的無意識（個人の人生経験に基づいて作られる無意識）と〈普遍的無意識（人類に共通する思考や感情の奥底に潜んだ内なる意識）〉に分けた考え方ですが、信綱の短歌は、後者の〈普遍的無意識〉が先行して感じられ、その概念をもつて個人領域に入り込むという絶妙な焦点深度で「おのがじしに」の精神が表現されている証といえるでしょう。

直接お会いしたことがない小生が厚かましくはあるのですが、白い雲の合間より頬をのぞかせ“勉強なされまし”という言葉が聞こえてくるようです。

何処に居ても心の旅はできます。一人でも多くの人が、佐佐木信綱の短歌の世界へ“Travel without moving”をしていただきれるよう努めてまいります。

参考文献『よくわかる佐佐木信綱先生 春風になろう』(佐佐木信綱顕彰会、二〇一六年)

ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学学者である佐佐木信綱（1872～1963）の遺功を称えるべく、昭和45年（1970）に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年（1986）に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を常時展示するほか、毎年秋頃には特別展も開催し、市内外への魅力発信に努めています。

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町 1707-3 TEL&FAX 059-374-3140

開館時間 9:00～16:30

休館日 毎週月曜、第3火曜（休日の場合は開館、翌日休館）

年末年始

アクセス 近鉄鈴鹿市駅から C-バス乗車

佐佐木信綱記念館下車徒歩 2 分

東名阪自動車道

鈴鹿 IC から車で約 20 分



資料館

※令和3年3月現在、資料館改修工事のため、信綱生家において臨時常設展を行っています。

発行

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課（鈴鹿市神戸一丁目 18-18）

TEL 059-382-9031 FAX 059-382-9071

HP 鈴鹿市文化財ガイド <http://suzuka-bunka.jp/>

